

ロシア帝国とチベット仏教

境界を越えて展開した仏教世界とロシア国家の交差点



①【研究の問い】

ロシア帝国と仏教。一見、遠い関係に思えるこの組み合わせは、実は18世紀以降のユーラシア世界で重要なテーマのひとつです。

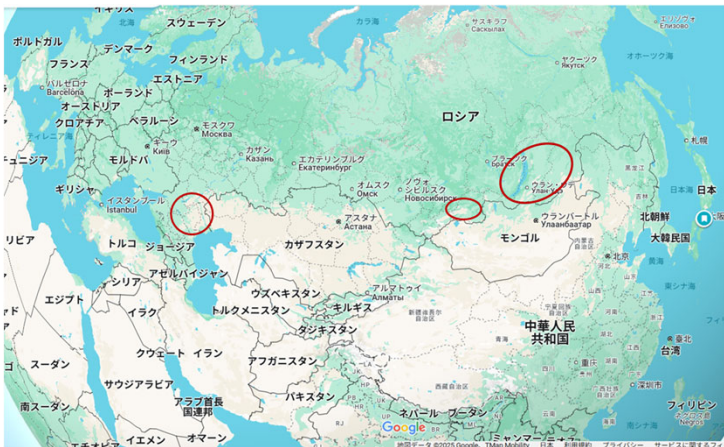
また、ロシア政府が、国内の仏教徒を通して、日本を含む仏教アジアを想像していたという点で、わたしたちにとってもとても重要な関係なのです。

本研究は、ロシア帝国がチベット仏教を信仰する民族(カルムイク人、ブリヤート人など)をいかに統治し、また仏教徒たちが帝国の秩序の中でどのように宗教を維持・再構築したのかを考察します。

②【歴史的背景:仏教とロシア国家の出会い】

17～18世紀、ロシア帝国の領土拡張により、チベット仏教を信仰するモンゴル系諸民族が帝国の一部に入れられました。

これにより、ロシア正教(キリスト教の一派)を国教とするロシアにおいて、非キリスト教の宗教集団としての仏教徒が帝国の枠内で制度的に認知されることになりました(cf. イスラム教は、それより数世紀先に公認されます)。



現代の地図です。ロシア国内の赤枠で囲まれている地域で、チベット仏教が主に信仰されています。

③【ロシア皇帝と仏教の関係】

ロシア皇帝は仏教の存在を単に容認するだけでなく、時にその「保護者」として振る舞いました。

例えば、シベリアのブリヤート人のあいだではロシア帝国支配下でむしろ仏教勢力が急速に拡大したのです。それは隣の「仏教大国」である中国・清朝に対抗するという、ロシア政府の意志の現れでした。

また、19世紀末には皇帝の命令のもとで国家による僧階制度が整備され、チベット仏教が「国家仏教」として制度化されていきます。皇帝の統治理念の下で、仏教は国家秩序の一部として組み込まれていき、独自の発展をしていくことになりました。

④【仏教徒たちの主体的対応】

仏教側もまた、受動的な存在ではありませんでした。僧侶や在地エリートたちは、国家の制度を活用し寺院の建立や仏教教育機関の設立を推進し、みずからの宗教伝統を守るために積極的に交渉しました。

また、20世紀初頭には、チベットやモンゴルとの連携や、「チベット仏教世界」の統合を志向する宗教的連帯運動も見られました。

⑤【帝国・宗教・民族の相互作用】

このような歴史は、宗教がたんに信仰の問題だけでなく、帝国の統治、民族のアイデンティティ、外交政策と深く関わっていたことを示しています。

ロシア帝国は、多宗教・多民族国家として仏教をも「国家の宗教」として制度的に取り込み、その中で仏教徒自身も柔軟に対応し、宗教のかたちを変えていきました。

⑥【ロシア仏教皇帝像】

さらには、ロシア皇帝を「菩薩の化身」と表象する動きも見られるようになります。

ロシア皇帝はキリスト教徒ですので、おかしいことですが、仏教側には体制に合わせて巧みに(都合よく?)思想的転回を見せる柔軟性をもっていました。

⑦【現代へのつながり】

無神論国家を標榜するソ連時代に一時的な断絶を経て、1990年代以降、ロシアにおける仏教は再び公共の場に復活します。

歴史を振り返ることで、わたしたちは現代における宗教と国家、民族との関係を考える手がかりを得ることができます。

⑧【まとめ:本研究の意義】

▼宗教と帝国の関係を歴史的に考えることで、多民族国家における統治の多様なあり方が見えてきます。

▼仏教が「帝国のなかでどのように機能したのか」を明らかにすることは、現代世界における宗教と国家、文化と政治の関係を考えるヒントにもなります。

▼異なる世界観を持つ宗教が、帝国という枠組みのなかでどのように共存し、変化していったのか。そこに本研究の核心的問いがあります。

⑨【さらに関心がある人は】

右のQRコードから写真をお楽しみください。



⑩【グローバル教育専攻のまなびへ】

教育協働学科グローバル教育専攻は、異文化・多文化共生に対する理解のもと、グローバル化社会における多様な教育課題の解決を創造できる人材の養成を目的とします。そのためにも、世界の多様な社会や文化について共に学んでいきましょう。